

平成26年度企画展示「あの人の直筆」

中嶋 恵子

展示会名：国立国会図書館平成26年度企画展示「あの人の直筆」
 会 期：平成26年10月18日（土）
 ～11月18日（火）
 （計26日）
 会 場：国立国会図書館 東京本館
 新館展示室
 来場者数：5,754人
 簡易図録：国立国会図書館ホームページ内PDFファイル
<http://www.ndl.go.jp/jp/event/exhibitions/comment1410.pdf>

【初めての打合せ】

展示会「あの人の直筆」には、展示会事務局を中心に多くの人が関わりました。事務局は当館の展示関連の仕事を統括する利用者サービス部サービス企画課展示企画係が主なメンバーです。その他に、資料を実際に所蔵する部署から数名が臨時の展示委員として展示会に関わりました。具体的には、人文課（古典籍係）、図書館資料整備課、音楽映像資料課、政治史料課からそれぞれ1～2名が参加しました。筆者も政治史料課の展示委員として参加したひとりです。

初めて「あの人の直筆」という展示会の仮題を聞いた時には、完成したときの展示のイメージが浮かびませんでした。しかし、その後展示会の準備に関わっていくなかで、しだいに「直筆」の魅力に引き込まれていったように思います。

筆者の所属する政治史料課では、大きく分けて憲政資料、日本占領関係資料、日系移民関係資料の3種類の資料を所蔵しています。「あの人の直筆」では、このうち主に憲政資料の分野が出展対象となりました。憲政資料は、幕末期から現代に至るまでの政治家、官僚、軍人などが所蔵していた文書類であり、普段は東

国立国会図書館では、所蔵資料を紹介し当館をよりよく知ってもらうため、広報活動の一環としてさまざまな展示会を企画しています。平成26年10月18日から1か月の会期で開催された企画展示「あの人の直筆」は、当館の展示会のなかでも近年まれにみる盛況ぶりとなりました。この展示では、近世から戦後にかけて日本の各分野で活躍した有名人約150人の直筆資料を集め、絵画や脚本の原稿も出展しました。

この稿では当館における展示会の準備作業の一端を紹介します。

京本館4階の憲政資料室で、主に研究者の方が利用されています。手書きの手紙や日記、メモが含まれ、著名人の直筆資料を多く出展できる見込みがありました。

展示会事務局と各課担当者が初めての打合せの場をもったのは平成26年2月の初めでした。4月上旬までに出展資料の選定を行い、6月末までに各出展資料の解題等を作成、その後、事務局で解題原稿を修正するというスケジュールでした。それまで展示会に関わった経験がなかった筆者には、まだまだ時間はたっぷりあると感じられましたが、やがて認識が甘かったことに気づくことになります。

【候補資料の選定】

まず、資料の選定に取り掛かりました。政治史料課が所管する憲政資料は、「伊藤博文関係文書」「陸奥宗光関係文書」のように、旧蔵者ごとに分けて整理し、保管された文書群が約500件、合計約37万点あります。各資料が誰の筆跡のものか、普段は特別な事情がないかぎり検証されることはありません。膨大な資料の中から書いた人が特定できる直筆資料を探す場合、最も確実と思われたのは手紙でした。手紙であれば、たいていの場合、差出人の署名があるため、その人物の直筆であると考えられます。もちろん代筆の可能性もあるため、複数のものを比べて一定した筆跡であることを確認したり、内容がややプライベートで代筆を頼む可能性が低いものを選定したりします。

著名人の手紙を探すツールとして心強い味方になったのが、憲政資料室に備え付けの発信者別カード索引でした。手紙は通常、受け取り手の旧蔵資料として残されます。例えば伊藤家旧蔵の「伊藤博文関係文書」であれば、伊藤博文のもとに届いた手紙が含まれます。逆に、伊藤が書いた手紙を伊藤博文関係文書で探しても、草稿が家族間の手紙しか見つかりません。この場合、伊藤が出した手紙の受け取り手になっていそうな人物の旧蔵資料（例えば、三条実美の資料を含む三条家文書、伊東巳代治関係文書など）の目録をみて伊藤の手紙を探す必要があります。こんな時、発信者別カード索引を伊藤博文で検索すれば、伊藤が発信人となった手紙が憲政資料室のどの文書に含まれているのかが簡単に分かります。つまり、この発信者別カード索引を利用すれば「あの人の直筆」に出展するのにふさわしい“あの人”の手紙を簡単に探すことができるのです。

そこで、発信者別カード索引を捲りながら、これはと思った著名人が出した手紙が含まれる文書名を次々にリストアップしていきました。誰の手紙が良いか、誰宛なら面白いかを考えながらリストを作成したあとは、現物の確認作業に移りました。現物は多くの場合くずし字で書かれているため、すらすらと読めるものではありません。筆者の場合、現在の部署に配属されてから数年経ち、幸い展示向きの内容か否かおぼろげながら判断できるようになりました。しかし、福沢諭

吉の手紙のように、あまりの達筆に全く歯がたらず、くずし字を活字化した翻刻集を頼りに内容を確認したものもあります。

出展する資料を探す方法としては、この他に著名人の筆跡を集めた書道の本なども参考にしました。その中には当館所蔵のものも掲載されており、且つ多くの場合翻刻も添えられているため、資料選定の際にはとても役に立ちました。

さて、憲政資料室では開室以来、日本近代政治史に関わる資料を収集してきましたが、実は文化人の直筆も多く所蔵しています。というのも、近現代の政治に関わる名士には文化人との交流がある人物も多く、横山大観、竹内栖鳳、島崎藤村、柳原白蓮などの手紙が見つかりました。また、親族間の手紙でも面白いものがありました。美術評論家であり、白洲次郎の妻としても知られる白洲正子（旧姓：樺山）の幼少期の手紙です。これは白洲正子の父方の祖父である薩摩出身の軍人・政治家である、樺山資紀の旧蔵資料に含まれていたもので、竹久夢二風の自画像も添えられた、かわいらしいものでした。

このように、憲政資料からは、政治家・軍人・企業経営者・文化人など幅広い直筆資料が出展候補となりました。

【候補資料の絞り込み】

各課で選定した候補資料は、さらに展示会事務局と展示委員全員による現物確認を経て、絞られていきました。その際

には、政治、経済、文芸など、多様な分野で活躍した人物の直筆を、バランスよく紹介できるように考慮しました。憲政資料では、坂本龍馬筆「新政府綱領八策」を含む「亡友帖」（石田英吉関係文書1）の出展が決まり、展示の目玉として広げて展示することになりました。この7.2mにおよぶ巻軸を全て広げて展示するのは、初めての試みでした。

現物確認の反省点は、最初の候補をさらに絞るべきであったということです。憲政資料からは当初40点程度を展示する予定でした。しかし、結果として展示候補が倍近くまで増えてしまい、その後の解題作成、展示スペースの確保などで厳しい状況になりました。また、展示会のアンケートでも点数が多すぎるというご意見を頂くことにもなりました。

【翻刻・解題の作成】

4月末頃から解題の作成が始まりました。まず、必要となったのは、出展資料の翻刻を作成することでした。伝記や資料集、書道の本などに既に翻刻が掲載されているものは、原物と照らし合わせて翻刻に間違いがないか確認するだけで済みます。そうでないものは、当館の客員調査員である季武嘉也創価大学教授を始め、課内の職員の力を借りつつ翻刻を作成しました。解題作成は、楽しくもあり苦しくもありました。点数をもっと絞り込めばよかったと思いましたが、資料によっては年代特定も難しく感じました。憲政資料関係の出展品の多くは手紙でし

た。封筒の消印により比較的簡単に年代が特定できる場合もありましたが、そうでない場合は、手紙の内容、固有名詞などを手掛かりに参考資料を調査しなければなりませんでした。

しかし、出展する資料について調べていくうちに、資料一点一点の面白さを発見できました。また、その面白さをどう伝えたらいいかと頭を悩ませることもありました。歴史上有名な場面に関連するものではなくても、何気ない手紙にも書いた人の人柄や意外な一面を感じられるものが多く、また思わぬこぼれ話が見つかることもありました。例えば、榎本武揚に宛てた福沢諭吉の手紙（明治25年2月5日付、榎本武揚関係文書25）からは、明治維新後の新政府に仕えることを「潔し」としない旧幕臣の意地が感じられます。与謝野晶子の手紙（昭和2年3月28日付、鶴見祐輔関係文書（書簡の部）1111-1）は、生涯に11人の子供を育て上げた晶子の母親としての顔が垣間見えます。

また、三菱の創始者、岩崎弥太郎の手紙（明治10年3月4日付、上野景範関係文書（寄託）7-2-2）に登場する留学生、川田龍吉について調べると、男爵薯の名前の起源にまつわる興味深いこぼれ話に出会いました。これは、原資料を調査する上での醍醐味を感じたときでもありました。龍吉は、岩崎の片腕として活躍した川田小一郎の息子であり、21歳の時にイギリス留学しました。留学中には当地の女性と出会い恋仲になりましたが、

結婚はかなわずに帰国、造船業界のために長く奔走しました。後年、イギリスで食べた、恋人との思い出の味であるジャガイモを北海道に普及させることに努め、そのとき龍吉が男爵になっていたことから、彼が栽培した品種が「男爵薯」と呼ばれるようになったという逸話が残っています。展示した手紙は、龍吉が留学する直前のものです。岩崎はそのなかで、イギリス在勤の特命全権公使、上野景範に対し、これから新潟丸に乗船してイギリスに向かう龍吉らの庇護を求めています。この先に龍吉を待ち受ける運命を思うと、わくわくした気分がさせられました。残念ながら、この逸話は字数の制限もあって解題では紹介できず、ギャラリートークなどの際に展示資料にまつわるちょっとした裏話として、参加した聴講者にのみ明かされました。今から思うと、コラムなどの形で紹介する方法もあったはずで、他の解題作成に追われて考えもつかなかったことが悔やまれます。

解題作成では、当館の膨大な蔵書が役に立ちました。資料の中には、当館のデータベース「国立国会図書館デジタルコレクション」で読むことができるものもありました。このデータベースは、当館が所蔵するデジタル資料を検索・閲覧できるサービスです。当館館内からであれば、200万点以上の図書・雑誌等を机上のパソコンから利用できるのです。実際に筆者が解題作成に利用した参考文献リストを確認すると、72点のうち約3割

の22点が当館のデジタルコレクションにより利用可能な資料であり、さらにその半数以上の14点はインターネットからも閲覧が可能なものでした。また、参考文献として利用した資料の中には、当館の過去の電子展示会に掲載されていたり、他機関がインターネット上に公開したりしているものも含まれていました。悪戦苦闘して解題原稿を書き終え、事務局に提出したのが6月末でした。その後は事務局による原稿確認があり、8月からは解題原稿の修正作業が行われました。

【展示会を楽しくする工夫】

展示会では、各資料所管課の展示委員による資料選定や解題作成と並行して、事務局を中心に様々な企画を考案しました。誰の直筆かを当てるクイズや、展示と関連した豆知識を載せたパネル、いくつかの展示資料を忠実に再現した複製の作成などです。坂本龍馬と徳川齊昭の文字を筆ペンでなぞるといふ企画は幅広い年代の来場者に好評だったと聞いています。

このように、展示会では来場者に楽しんでいただけるように知恵を絞ります。今回の展示では、翻刻の用意にも力を注ぎました。ただ単に活字化したものを原資料の横に添えても、よほど慣れた人でなければ、なかなか読みこなせません。明治期の手紙などは、くずし字を活字化しても、一瞬漢文ではないかと錯覚してしまいそうになります。一部の慣用表現では漢文を読むときのように、「難有

(ありがたい)」「有之(これあり)」のように下から上に読む場合もあります。それらに関しては、漢字の記載は原文通りとして、振り仮名を読み下し風に添えて読みやすくなるよう工夫をしました。

【展示資料の陳列】

さて、解題等のパネル、翻刻がそろい、会場の設営も終われば、いよいよ展示資料を並べます。ここで、見やすい展示と資料の保存を両立させるため、収集書誌部資料保存課の協力を得ました。資料保存課からは、あらかじめ展示方法や台紙の要不要についてアドバイスをもらい、展示作業当日には、資料保存課の担当者が手際よく台紙を設置しました。巻軸状の資料は、資料を傷つけない方法で慎重に固定し、冊子体の資料も専用の台にのせました。特に、文字や紙が薄い資料などは、文字を見やすくするために白い台紙が必要となります。台紙の効果は大きく、貴重であるにもかかわらず、なんだか冴えない雰囲気だった西郷隆盛や松方正義の手紙も見栄え良く、本来の良さを伝えられるようになりました。

【おわりに】

展示会は、一日平均約220人の来場がありました。また、当館客員調査員によるフロアーレクチャーや展示委員によるギャラリートークでも、毎回約35人が集まり、アンケート結果も好評でした。当館の企画展示としては成功だったといえます。文字が中心で派手な展示ではあ

りませんでした。それでも、来場者の方々が熱心に展示を見てくださるのはとても嬉しく、展示委員としてこの展示に関われた幸運を感謝しました。

なお、同展示は平成28年度に当館の電子展示会として復活するとともに、続編が秋の当館企画展として再登場する予定です。多くの観覧者にお楽しみいただければ幸いに思います。

※注 同展示についての関連記事は『国立国会図書館月報』通号643, 2014.10 (URL <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8771520/1>) にあります。

(なかしま けいこ

利用者サービス部政治史料課)